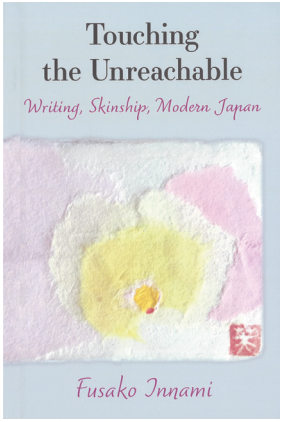
書評

印南芙沙子『届かぬものに触れるということ——書き、触れ合う近現代日本』

Fusako Innami, *Touching the Unreachable: Writing, Skinship, Modern Japan*

片岡真伊



University of Michigan Press, 2021

「触覚」「接触」への関心が、各領域においてこれまで以上に高まりつつある。建築を現象学的に洞察し、現代社会における視覚の優位性に疑義を呈すと共に、触覚を含むその他の諸感覚の重要性を訴えたユハニ・パッラスマー著『建築と触覚——空間と五感をめぐる哲学』（草思社、二〇一二［英：*The Eyes of the Skin: Architecture and Senses*, 1996］）、「触れること」「接触」を通じて「うつし（写し・移し）」の諸相を辿り、接触面の実相を解き明かした稲賀繁美著『接触造形論——触れあう魂、紡がれる形』（名古屋大学出版会、二〇一六）、二十世紀前半のモダニズムにおける触覚言説や表象を多角的に考察した高村峰生著『触れることのモダニティ——ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』（以文社、二〇一七）、触覚に焦点をあて、他者との関わりの諸相や倫理を明らかにした伊藤亜紗著『手の倫理』（講談社、二〇二〇）など、その例は枚挙に暇がない。こうした背景には、「触覚」と人の営みとの不可分性に加え、テクノロジーの発達による視覚偏重の加速化に伴い人々の触覚への感度が鈍化・希薄化しつつあるという、諸感覚の有り様の急速な変化も少なからず関係していよう。さらにこの触覚への意識は、二〇二〇年以降のコロナ禍において一時期は禁忌ともされた「接触」機会の激減を経て、一層の高まりをみせている。

こうした流れの中、二〇二一年八月に刊行された印南芙沙子著『届かぬものに触れるということ——書き、触れ合う近現代日本』（*Touching the Unreachable: Writing, Skinship, Modern Japan*, University of Michigan Press, 2021）は、「触覚」を通した接触に着目しつつも、

“tactility”（触覚・触知性、とりわけ「手」で物理的に触れること）に重きを置く研究とはまた異なる“touch/touching”（感情・感覚の両方に用いられる、日本語で言うところの「ふれる」「さわる」こと）の視座から考究している。著者が焦点を当てているのは、必ずしも物理的な接触・精神的な触れ合いの表象に止まらない。タイトルが示唆するように、真の意味では「触れることの叶わない」「手の届かぬもの」への憧憬や苦悩をもその射程に収めており、そうした経験がいかなる形で文学テクストに表されているのかという現象学的問いを、日本近現代文学のテクストにおける触覚描写の分析を通して探究している。本書には、「届かぬもの」に「ふれる（さわる）」（“touching the unreachable”）という、一見相矛盾する様が題に据えられている。これは言い換えれば、本書が接触する側（主体）と接触される側（客体）、すなわち能動と受動の二分法では割り切ることのできない領域に光を当てていることを暗示する。と同時に、触覚を主体と客体とを結びつけ、隔てるもののない「直接的感覚」として捉えるだけでは見えてくることのない、新たな視界を拓く可能性を予感させてくれる。

本書の序章「感覚を媒介する文学的触覚」の冒頭において、まず著者は着想の契機となった吉行淳之介著『暗室』の一場面、すなわち主人公の中田が恋人・夏枝との交わりの中で他の男の影を感じ、彼女の身体と自身との間に「膜」があることを意識した経験が語られる場面に言及し、“touch”（「さわること」「ふれること」）には、「直接的な接触（direct contact）」のみならず、過去の経験・記憶などが割り込む「蓄積的な」側面があると述べる。加えて、従来の日本近現代文学研究では、「身体（body）」「親密性（intimacy）」に関する分析やテクストの読みに「ジェンダー」や「性」への偏重傾向があると指摘する。だが、「ふれる」「さわる」ということは、人に他者、そして自己の「不可知性（unknowability）」を認識させる領域でもある。だからこそ登場人物たちは、自身とは異なる存在に触れたいという欲求へと駆り立てられる（p. 39）、と著者はいう。

この前提を踏まえたうえで本書は、「さわること」「ふれること」を描き出した四名の日本の近現代作家に光を当て、その触覚描写の諸相を明らかにしている。第一章「愛されるもの——届かないもの」では、川端康成（一八九九～一九七二）の「片腕」や『少年』『眠れる美女』などにおいて、川端が愛の対象の不可触性をどう描き出しているのかを綿密に辿っている。つづく第二章「距離・光・陰翳劇における触覚」では、谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）の『鍵』や「春琴抄」、『陰翳礼讃』、「刺青」などでの「ふれること」「さわること」の書かれ方、すなわち主人公たちの（そして時には読者の）憧憬の対象（客体）との部分的な接触（偏愛）に伴う埋まることのない距離（またその「あいだ」で生じ

る力学）が、彼らを憧憬の対象に対する欲望へと駆り立てる様を詳らかにしている。第三章「媒介された触覚――膜、皮膚、そして「私」」では、本研究の着想源でもある吉行淳之介（一九二四～一九九四）の『暗室』などにおいて、恋人の過去の触れ合いの痕跡を主人公が感じ取ることで、相手との直接的接触を阻む「膜」が生じること、そして度重なる触れ合いを通じて、主人公がいかにして自己を認識するのか、言い換えればその接触により「私」がどう形作られているかを論じる。これらの検討を踏まえたうえで最終章「皮膚を通して関係を新たにするということ」では、松浦理英子（一九五八～）の『ナチュラル・ウーマン』などを取り上げ、既存の家族概念を超えた、スキンシップを通じて「固定化」されない親密さや他者との繋がりがどう再構築されているかを、丹念に読み解いている。

本書は、以上のような日本近現代文学における触覚言説・表象の考察を通じて、従来の「“touch”（ふれること、さわること）＝性的なもの」という読みの構図（p. 14）だけでは見えてくることのない触覚表象の多面性を浮かび上がらせている。これらの著作を触発源とした川端康成トリロジーによるパフォーマンスや『春琴 Shun-kin』（世田谷パブリックシアター、コンプリシテ共同制作）などの舞台化された翻案の幾例かを除き、本論は、あくまでも日本近現代文学のテクストに密着した形で、“touch”を分析することに主眼を置いている。だが、本書を読み進めると、もし仮に考察範囲をその他の翻案作品にまで広げたならば何が見えてくるのだろうかという、さらなる関心が掻き立てられてくる。例えば、本書でも言及されている川端の『眠れる美女』といえば、国内外で幾度も映画化され、ノーベル文学賞受賞者ガブリエル・ガルシア＝マルケスによる短篇「眠れる美女の飛行」（一九八二）などの触発源であることでも知られている。日本近現代文学における分析に止まらず、その触覚表象の伝播に目を向ければ、「言語化し得ないと考えられている感覚要素をいかにして言語化し得るのか、あるいはし得ないのか」（p. 2）という著者が投げかけた問いの一つ、言い換えれば、一体何が文学的触覚たらしめるのかという根源的な問いや、「書くこと」と「さわる」「ふれること」との関わりの特徴を、より多角的に捉える一助になるかもしれない。そして、真の意味で、著者が目指すところの「文化的境界線があるという思い込みの限界を超えるような、実りある対話の創造」（p. 13）の希求にも結びつくのではないだろうか。

とはいえ、以上の点は、あくまでも著者の研究が有する更なる発展や広がりの可能性を示唆するものであり、本書が身体的な経験や感覚・感情をテクストへ「うつす」という意味での翻訳論としても、また既存の身体性をめぐる議論にも、多様な示唆を与えてくれる一書であることはいうまでもない。研ぎ澄まされた五感

を通して紡がれる言葉は、詩的かつ読み応えのあるものであり、日本研究、あるいは文学・思想・哲学・美術など、「触覚」「接触」表象に関心を寄せる様々な分野の研究者・大学院生の触発源としても、一読をすすめたい。